

ヴェーユ身体論〔補Ⅳ〕

村 上 吉 男

また、〈歓喜のなかに必然性を感じることができるのは…（それは）ただ美の感情の仲立ちによってのみ感じられ得る〉という、換言すると〈必然性（純粋な歓喜）を感じ〉得るは〈美の感情の仲立ちによ〉るという箇所であって、〈美の感情〉はどう〈必然性を感じる〉にかかわる（繋る）とみることができるかである。筆者は上記引用文中の括弧に付した〈それは（cela）〉が前文を受けると指摘できるはもとより、わけでもそのなかの〈必然性〉の一語を指示代名詞（cela）に当てはめ、〈それは〉以降の文章なる受動態訳文を能動態訳文に置換させるならば、〈美の感情の仲立ちは必然性を感じる（ことができる）〉といういい直しを可能にし、ここから、前記して明かしたような〈歓喜〉が〈必然性（純粋な歓喜）を感じる〉とした例と同様に、〈超自然的な領域（魂）〉への〈仲立ち〉となる〈美の感情〉は〈必然性〉を、要は「必ず美の純粋な感情になること」を〈感じる〉とせざるを得ないことを導き出せるにちがいない。これをさらに〈理解できる〉ためには、ヴェーユに〈世界の美において、生の必然性が愛の対象になる〉と語らせた既出引用文が参照される必要がある。それは〈世界の美〉と〈（世界の）美の感情〉はかかわり（繋り）をみせてくるからである。とまれ〈生の必然性〉とは〈この世界〉たる〈自然（しぜん）〉と同義であり、その現実の一が〈わたしたち〉の〈自然的な魂（l'âme）〉中の〈魂（une âme）〉で〈感じる（sentir）〉ことができる〈世界の美（感受性）〉なのである。かつ現実の一たる〈世界の美〉が〈この世界（自然）〉の〈必然性（必ずそうなること）〉としてあったほか、〈不幸〉もまた〈必然性〉以外ではなかった。筆者は〈世界の美〉（もしくは〈不幸〉）が繰返しいうが、人間外部の〈自然（の必然性）〉そのものとなってあらわれてくるし、これらが人間内部の〈l'âme〉中の〈une âme〉に各受け入れられた際、身体での〈世界の美（感受性）〉に

〈魂〉の〈感じる (sentir)〉が働きかけて、〈感受性のさらに高級な部分〉と記された、〈魂 (une âme)〉の〈感受性〉を生み出し、その〈感受性〉(の中味)をして〈世界の美〉(もしくは〈不幸〉)たらしめると読んだ(〈感受性〉の中味については後述する)。この〈世界の美(感受性)〉に、時間を経てか、さらに〈魂〉の〈(再び)感じる (ressentir)〉が働きかけるならば、〈une âme〉に〈(世界の) 美の感情〉をもたらすであろう(〈(世界の) 美の感情〉はしかし、もはや〈感受性〉ではなく、〈感情〉能力になっているとみておかねばならない)。またこの〈(世界の) 美の感情〉に上記の場合に倣って、〈(再び)感じる (ressentir)〉が働きかけるといえるとなると、今度はそこから、〈歓喜〉という〈感情〉を生じさせることもあり得よう。これがこの段落冒頭の引用文中の〈美の感情の仲立ちによってのみ、歓喜のなかに必然性を感じる〉と記されたうえでの、〈美の感情〉から〈歓喜〉に達する証左になるし、彼女だけでなく、〈わたしたち〉にもたらされる、この〈美の感情〉や〈歓喜〉をして〈この世界(自然)〉を〈必然性〉たらしめることが、そのうえ「あの世界」も〈必然性〉になること、つまり〈超自然的な領域〉でその〈魂〉をして〈神〉に出会わせることも〈必然性〉であることが上記二引用文によって証明されるのである。かつまた彼女が語る〈感受性のさらに高級な部分〉にあって、この〈感受性〉は〈自然的な魂 (l'âme)〉中の〈魂 (une âme)〉の能力を、〈高級な部分〉は〈超自然的な魂 (l'âme)〉をさすとみたのだから、すでに触れた〈世界の美(感受性)〉が、〈(世界の) 美の感情〉が、〈歓喜(感情)〉がそれぞれ、〈魂 (une âme)〉から〈自然的な魂〉全体に亘るほどの、〈激し〉い〈運動〉に見舞われるならば、〈自然的な魂〉を〈高級な部分(超自然的な魂)〉に立ち〈入〉らせたなかで、〈世界の純粋な美(感受性以上)〉に、〈(世界の) 美の純粋な感情〉に、〈純粋な歓喜〉にされざるを得なくなろう。彼女が〈感受性以上〉という語句を使用する以上、〈高級な部分〉は〈自然的な魂〉の〈une âme〉の〈感受性〉と諸〈感情〉や〈un esprit〉の〈思惟〉の各部位(部分)を示すのでないことが諒解されねばならない。と同時に、筆者が〈(世界の) 美の感情〉をもって「具体例」にすると前段に記しおいたことかというと、〈(世界の) 美の感情〉が〈(世界の) 美の純粋な感情〉になることこそ(したがって上記していた〈感受性(世界の美もしくは

は不幸)), その〈歓喜〉〈願望〉なる諸〈感情〉あるいは〈知的注意力〉さえおのおの、この〈(世界の) 美の感情〉をして〈(世界の) 美の純粋な感情〉たらしめるのと同様になり得るのだ), 筆者は〈高級な部分 (超自然的な魂)〉に〈(世界の) 美の感情〉が〈受容, 同意, 愛 (エロース)〉された〈移行〉すなわち〈感じる (sentir)〉であると確認し得るわけである。

ヴェーユは自らの〈動の行動〉を発端に、かの〈受容, 同意, 愛 (エロース)〉を確かに体験すれど、体験はそうした諸語句 (名辞) の通りに〈行動〉することを意味させはしないにもかかわらず、その体験を〈わたしたち〉に伝えるに、これらの語句 (名辞) を〈思惟 (静の行動)〉によって表現するほかない手段にあって、〈この世界〉が彼女に〈思惟と行動〉のこうした関係を背負わす〈必然性〉にさせられてあるばかりか、〈矛盾〉に帰するゆえんの一とみられるのである。彼女の〈行動 (動の行動)〉ではなしに、せめて彼女の〈思惟 (静の行動)〉に辿りつきたくば、その語句 (名辞) 表現に従う以外にない〈わたしたち〉にとって、彼女の実際の諸〈行動 (体験)〉を振返って記すところの、例の〈自然的な魂〉の〈超自然的な魂〉への〈移行〉すなわち〈感じる〉は、〈(世界の) 美の感情〉をたとえにいうと、これを〈受容〉し、これに〈同意〉することを、この〈受容〉と〈同意〉によって、〈生の必然性〉である〈世界の美〉の、その〈感情〉 (また〈感情〉のほかではかかる〈世界の美〉たる〈感受性〉) が〈愛の対象になる〉のであり、〈愛〉をして〈(世界の) 美の感情〉 (また〈世界の美 (感受性)〉を〈(世界の) 美の純粋な感情〉 (また世界の純粋な美 (感受性以上)) たらしめる〈超自然的な能力〉をもたさずにはないことをさし示すと確認させられるしかなくなる。換言すると〈(世界の) 美の感情〉また〈世界の美 (感受性)〉が〈超自然的な魂〉に〈受容, 同意〉されるや否や、こうした〈必然性〉のもとにあるは〈愛 (エロース)〉だけとなり、〈愛 (エロース)〉は〈(世界の) 美の純粋な感情〉また筆者にいう「世界の純粋な美 (感受性以上)」であることを語るということである。だが筆者が想起するに、〈超自然的な魂〉においてさえ、上記中の〈(世界の) 美の感情〉の〈受容, 同意〉が〈受動〉に、〈神〉に〈方向づけ〉得る、〈超自然的な能力〉たる〈(世界の) 美の純粋な感情〉すなわち〈愛 (エロース)〉が〈能動〉にみえようが、彼女に現に生じくる〈超自然的な

魂〉は〈空無（真空）〉とされたがために、そこに〈受動〉〈能動〉をはじめとした、以上の諸語句（名辞）がそれとして、あるいはその区別をもって用いられたとみる必要はない。なぜなら筆者には、〈超自然的な領域（魂）〉に見出された諸語句（名辞）はすべて、彼女（人間）にとって〈愛（エロース）〉に帰する表現、デカルト的にいえば〈同一のことがら〉と捉え得る表現にしかならないと察知できるからである。

その〈愛（エロース）〉ですら、ヴェーユには〈神（父）は神（子）が神（父）を愛（エロース）することを神（子）に対して証しする〉ごとき、〈神が愛である〉〈愛〉の一でなければならなかった。さすれば〈神が愛である〉とされた、もう一つの〈愛〉とは、つまり〈神（父）は…神（子）に対して証しする〉とは何を示唆させるか。それは彼女にとって、〈神（子）〉イエスの住まう〈この世界〉が〈必然性（世界の美や不幸）〉という〈愛（アガペー）〉に〈創造〉されているとみえた〈愛〉であった。彼女は〈わたしたちが神を愛（エロース）することができるようにと、愛（アガペー）によって、わたしたちから撤退するのは神なのである〉と断じていた。〈この世界〉はだから、「あの世界」と比べ、〈完全〉では〈純粹〉ではなくなった、別言すると〈自然的な魂〉を〈超自然的な魂〉に〈移行〉できることで、〈この世界（自然的な領域）〉での〈矛盾〉の解消に結びつかせるのだ。〈神が愛である〉はこのように、〈父〉と〈子〉なる、おのおのの〈神〉からする〈愛〉なのだから、彼女（人間）もまたこの〈アガペー〉と〈エロース〉に見習いまねばならぬし、そのためにも〈この世界〉と「あの世界」の各〈必然性〉を彼女だけでなく、〈天命（使命）〉として背負わねばならぬことになる。少なからず人間は〈愛（アガペー）〉に対する、〈超自然的な魂〉での究極の〈愛（エロース）〉を見出せずに、〈神が愛である〉ことを〈神〉に返す、いわゆる《逆創造》を完成せしめ得ないのである。

以上はすでに一見していた通りの結語の繰返しでしかないが、そうした結語をば、今度はヴェーユが〈超自然的な魂〉に関して用いた諸語句（名辞）に対しても与えおくことが筆者に課せられる。「あの世界（超自然的な領域）」の〈超自然的な魂〉における〈受容、同意、愛（エロース）〉にあって、彼女の〈思惟（静の行動）〉による、これらの語句（名辞）が「あの世界」を〈必然性〉

と捉えさすとさえいわせるなかで使用されることは、これら自体現実に〈必然性〉に従う通りに、しかもその順次にて生じたことを示唆させるにちがいはなかろうが、それでも〈受容、同意〉はたとえば〈世界の美（感受性）〉や〈（世界の）美の感情〉の、要は〈愛（アガペー）〉の〈超自然的な魂〉への「受け入れ」にすぎないのであって、〈受容、同意〉がそれら自身で直接〈神〉に〈方向づけ〉を可能にする〈愛（エロース）〉になり得ないといえる一方で、この〈受容、同意〉を経ずして、〈愛（エロース）〉の生じることがない、その〈愛（エロース）〉はなるほど〈神への愛〉にみられども、〈超自然的な魂〉が〈神が愛である〉たる一の〈愛（エロース）〉をして「必ずそうなる」〈必然性〉にさせられざるを得ないことに、また〈空無（真空）〉であったことにかかわるならば、要は〈超自然的な魂〉が〈空無（真空）〉なる〈必然性〉であるならば、〈愛（エロース）〉はその語句（名辞）として〈神〉に働きかける〈能動〉の意を有する必要がなくなろう。そうなると〈愛（エロース）〉の正体は一体何かである。〈愛（エロース）〉は「世界の純粋な美（感受性以上）」、〈（世界の）美の純粋な感情〉ならびに疾うに触れた〈純粋な歓喜〉〈純粋な願望〉と〈創造的注意力〉や〈直観的注意力〉という諸〈超自然的能力〉に換言することが許されていた。ここから筆者が〈愛（エロース）〉について結語できるは、上記した〈超自然的能力〉が各〈愛（エロース）〉に現になることは、各〈愛（エロース）〉を各〈空無（真空）〉にさせることである、とどのつまり〈愛（エロース）〉は実際の〈受容、同意〉と同じく、〈空無（真空）〉でなければならないと。このことは〈感受性のなかの空無（真空）こそ、感受性以上に運ぶのである〉とした既出引用文に代表されていわれることではなかったか。しかり。この引用文は、〈空無（真空）〉が〈自然的能力〉の〈感受性のなか〉にもたらされずば、〈超自然的能力〉の一たる〈感受性以上〉も〈空無（真空）〉になり得ないことを、それだけか、〈自然的能力〉と〈超自然的能力〉とがこの場合のような関係を持ち得ないことを語らせてくる（だから他の場合の関係も〈感受性〉と〈感受性以上〉の関係と同様であると指摘することができる）。したがって〈超自然的な魂〉の、〈能動〉であり得なくなる、〈感受性以上〉なる〈愛（エロース）〉は、彼女に〈わたしたちは善（神）を（〈手に入れることができない〉の）だか

ら) 受け取るしかできない) と語らせた〈愛 (エロース)〉になるほかない。

だが〈愛 (エロース)〉はなぜ、〈空無 (真空)〉に関与し、〈受け取る〉だけの〈超自然的能力〉であるとみるかが証明される必要がある。ヴェーユの場合、〈超自然的な魂〉が〈空無 (真空)〉に達するには、そこに生み出された、各〈超自然的能力 (愛 (エロース))〉が後段で問う〈身体〉の、実際の〈行動 (動の行動)〉での〈激し〉き〈運動〉に伴われ、〈自然的な魂〉全体を包み込むことを満たす必要があった。その〈自然的な魂〉のさらなる、〈激し〉き〈運動〉のせいで、〈自然的能力〉に〈空無 (真空)〉が生じ、この〈空無 (真空)〉をして〈自然的な魂〉を〈超自然的な魂〉に〈移行〉せしめる、つまり上記引用文に語られる通り、〈感受性のなかの〉〈空無 (真空)〉をして〈感受性〉なる〈自然的能力〉を〈感受性以上〉なる〈超自然的能力 (愛 (エロース))〉に〈運〉ばせる (移行たらしめる)。だからかかる〈愛 (エロース)〉も〈空無 (真空)〉以外であり得なくなるは当然である。だがこのことで留意すべきは、彼女が現実体験したことを、〈自然的な魂〉や〈超自然的な魂〉と、その各〈空無 (真空)〉と、また各〈自然的能力〉や各〈超自然的能力 (愛 (エロース))〉と、その各〈空無 (真空)〉という諸語句 (名辞) であらわせども、そのとき彼女はこうした語句 (名辞) を自らの〈思惟 (静の行動)〉によって認識 (意識) していたのではないと見て取ることにある。人が彼女の〈行動 (動の行動)〉たる〈激し〉き〈運動〉と同時に、これらの語句 (名辞) を彼女自らに認識 (意識) させないはずがないといい続けるはそれでも、筆者にいう「何もない」「あの世界」に、しかし彼女が〈神〉の住まいするとみなす「あの世界 (超自然的な領域)」にいまだ到達し得ないことを、要はその〈空無 (真空)〉に、すなわち〈愛 (エロース)〉の〈空無 (真空)〉にとどいてはいないことを明かすだけになる。そのうえ彼女のかかる体験はこれらの語句 (名辞) で現実になったのではないにしる、これらの語句 (名辞) に倣い語らねばならぬ筆者にとって、〈愛 (エロース)〉の〈空無 (真空)〉が〈空無 (真空)〉の〈超自然的な魂〉にするとみえるのだから、彼女が〈愛 (エロース)〉の〈空無 (真空)〉を〈受け取る〉としたことは、彼女自らをして、〈空無 (真空)〉の〈超自然的な領域〉に住まうといわせる〈神〉を〈受け取る〉ことであり、この〈空無 (真空)〉を各〈愛

〈エロース〉すなわち各〈超自然的な能力〉に〈運ぶ〉〈超自然的な魂〉において〈受け取〉らせねばならないことを意味させる。

しかれども〈超自然的な魂〉が何ゆえ、〈超自然的な領域〉の〈空無（真空）〉にかかわる〈神〉を〈受け取〉らねばならないかである。〈超自然的な領域〉の〈空無（真空）〉は「何もない」ところのそれを示唆させもするからして、そこに〈入〉れたとて、〈神〉が忽ちみえるわけではないのである。〈入る〉には〈愛（エロース）〉すなわち〈超自然的な能力〉を見出すことが課せられ、しかもこれが〈神〉に出会うべく、〈空無（真空）〉になる必要があった。さすれば〈愛（エロース）〉の〈空無（真空）〉は〈超自然的な領域〉をも〈空無（真空）〉にすると捉え得た。この〈空無（真空）〉にかかわる〈神〉を〈愛（エロース）〉するという〈超自然的な能力〉は、それが〈空無（真空）〉にならねばならぬがゆえに、〈神への愛（エロース）〉の意でも、ましてや〈神の愛（アガペー）〉の意でもなく、ヴェーユに独自に語られる〈愛（エロース）〉であると察知させる。この〈愛（エロース）〉がまったき〈空無（真空）〉になって、要は後者も前者にほかならなくなつてはじめて、彼女には〈神〉がみえてきたし、〈神〉との出会いが現実になったといえる。

とまれ、さらに質さねばならぬは、〈愛（エロース）〉に〈運〉ばれた〈超自然的な魂〉がその〈空無（真空）〉を、すなわち〈神〉を〈受け取る〉と筆者にいわせた際の、〈受け取る〉についてである。〈受け取る〉は〈recevoir〉たる語で記されていた。これはだから、ヴェーユがほかで動詞として用いた〈accepter〉や〈consentir〉と同義であるし、同時に後者の各語を〈acceptation〉や〈consentement〉をもって〈受容〉や〈同意〉と訳した名詞に重ね合わすことができる。すると彼女が述べていた、一連の〈受容、同意、愛（エロース）〉という各語句（名辞）は〈受け取る〉ことの謂に相当すると、換言すると〈愛（エロース）〉に等しいのが〈受容、同意〉でもあるとみることができてくる。だが〈受け取る〉は〈受容、同意〉との面で語られるだけではなかった。〈受け取る〉は〈愛（エロース）〉の〈空無（真空）〉を〈受け取る〉ことにあった。これを現実にするために、繰返しいうが、〈愛（エロース）〉という〈超自然的な能力〉の誕生とその〈空無（真空）〉の現出とが欠かせなかった。その際〈愛

〈エロース〉は〈感じる〉(という語句(名辞)を用いる)ことなしに、生み出されないのに対し、〈受容、同意〉にこの〈感じる〉面(要素)をみることが不可能であった。そこで〈受け取る〉とは、あの既出引用文を例にしていえば、〈自然的な魂〉に生じた〈感受性〉をして、その〈感受性のなかの空無(真空)〉を〈感受性以上(愛(エロース))〉に〈運〉ばせることを、つまり〈感受性以上(超自然的な能力)〉をも〈空無(真空)〉の〈空無(真空)〉にさせることを〈受け取る〉ことでしかなくなるのだ。別言すると〈自然的な魂〉から〈移行〉された〈超自然的な魂〉が〈移行〉の一を証したる〈感受性以上〉を導出し、これによって〈空無(真空)〉になることは、〈超自然的な領域〉に〈入〉らせると同時に、〈超自然的な領域〉を〈空無(真空)〉にさせずにいないということである。そのうえ彼女にあって、そこに〈神〉が在すとみれば、彼女は〈空無(真空)〉すなわち〈神〉を〈受け取る〉といえるほかならなう(彼女には〈神〉を〈受け取る〉は〈空無(真空)〉を〈受け取る〉に、またこの逆の表現にも等しくなろう)。そうすると〈愛(エロース)〉の〈空無(真空)〉すなわち〈神〉を〈受け取る〉は筆者にとって、彼女が自らの〈空無(真空)〉なる〈超自然的な魂〉にて〈神〉(恩寵)を〈待つこと(attente)〉にしかならなかったといい得たのである。

前段までの既述により明らかにされることは、〈自然的な魂〉での〈自然的な能力〉なる、例の〈感受性〉が生じずに、〈超自然的な魂〉での〈超自然的な能力〉の一である、〈感受性以上〉という〈愛(エロース)〉に繋がらないこと、これを前記した引用文〈感受性のなかの空無(真空)こそ、感受性以上に運ぶ〉でいい換えると、〈感受性のなかの空無(真空)〉をして〈空無(真空)〉を〈感受性以上(超自然的な能力)に運ぶ〉と読み取らせるのだから、〈感受性以上(愛(エロース))〉も当然〈空無(真空)〉で、またこの〈愛(エロース)〉に満たされる〈超自然的な魂〉や〈超自然的な領域(あの世界)〉さえ〈空無(真空)〉でなければならぬこと、それゆえこれによって〈愛(エロース)〉の〈空無(真空)〉という表現も可能になること、さらに以上に倣えば、かの〈諸感情〉たとえば〈歓喜〉〈願望〉〈絶望〉〈苦痛(頭痛)〉〈不幸〉、あるいは〈知的注意力〉のそれぞれ〈のなかの空無(真空)〉をして各〈空無(真空)〉を〈純粋な歓喜〉

〈純粋な願望〉など〈に運ぶ〉のと同様になること、だからヴェーユにあっては、各〈超自然的能力〉という〈愛（エロース）〉の〈空無（真空）〉をもって、〈空無（真空）〉すなわち〈神〉を〈待つこと（受け取ること）〉ができると断じられることにあるのだ。

そこからは次のことを再度証明することができる。すなわち一に、いくつかの〈愛（エロース）〉の各〈空無（真空）〉をして〈神〉との出会いを可能ならしめた、ヴェーユの体験は、要は〈身体〉の〈行動（動の行動）〉に発し、〈自然的な魂〉に影響を及ぼさずにいなかった体験は、その〈自然的（諸）能力〉を〈超自然的な魂（領域）〉の各〈超自然的能力〉たる〈愛（エロース）〉に〈運〉ばせ（移行させ）ても、〈超自然的な魂（領域）〉が〈空無（真空）〉にかかわっているだけに、〈超自然的な魂〉や〈超自然的な領域〉をはじめ、〈愛（エロース）〉〈空無（真空）〉や〈神〉という語句（名辞）を自ら生み出し、〈超自然的な魂（領域）〉の語句（名辞）を除く、それぞれに従われたり、このそれぞれの語句（名辞）になるよう命じたりするのではなかったと。換言すると〈自然的な魂〉の〈感受性〉や諸〈感情（世界の美の感情、歓喜、願望）〉などの〈自然的（諸）能力〉の〈なかの〉各〈空無（真空）〉が各〈超自然的能力（愛（エロース））〉に〈運ぶ〉のであって、「あの世界」のことをさして語られる、語句（名辞）としての〈空無（真空）〉自体がこれも同じ言葉でしかない、各〈愛（エロース）〉に〈運ぶ〉のではないということである。

さすれば一に、ヴェーユにあって、筆者にいう「あの世界」に関与し記された諸語句（名辞）はいかに理解されるべきか。彼女が〈わたしたち〉に伝えることを意図していたかどうかは定かでないにしろ、諸語句（名辞）を含めた、膨大な書き物を遺したことは確かである。それはだから、「あの世界（超自然的な領域）」や〈超自然的な魂〉に関する諸語句（名辞）を生み出すことさえ、〈自然的な魂〉の〈思惟（静の行動）〉が可能にすることを、要はこの〈思惟（静の行動）〉は〈超自然的な魂〉に生じる、そのあらゆる体験を書き留める〈手段として役立つ〉にすぎないことを明らかにさせる。〈思惟（静の行動）〉がたえず〈手段〉にほかならなくなるは、上記の「体験を書き留める」うえで、また〈この世界（自然的な領域）〉のもろもろを問い、構想し、表現するうえでも〈役立

つ〉能力であったからである。

すると一に、〈わたしたち〉にとって、少なくとも筆者にとって、ヴェーユが哲学者であることを主張し、その哲学が何かを跡付けさせるには、〈身体〉ならびに〈自然的な魂〉や〈超自然的な魂〉に関係し用いられた、あらゆる語句（名辞）が検証されねばならなかったし、これらに亘る、あらゆる語句（名辞）のうち、例の、〈身体〉の〈行動（動の行動）〉として生じる〈感受性〉や〈自然的な魂〉での〈感受性〉と諸〈感情〉の〈超自然的な魂〉への関与という、いくつかの能力の語句（名辞）によって、「知る作用（認識（論））」が組み立てられていると、かつ彼女にいう哲学を知るにあつては、この「認識論」が「存在論」や「実践論」より先きにくるとみておかねばならなかったのである。だから筆者は、彼女の場合、たとえばデカルトによる、その中味は彼女と異なるとみえども、いわゆる《cogito (je pense)》（認識論）に立ち展開された哲学と同様に、「認識論」を優先させなくば、彼女に窺えるといえる哲学が成り立たなくなると、しかしながらデカルトの哲学が認識論からはじまり、〈sum (je suis)〉という存在論ならびにこれらに依拠した実践論に繋るのとは相違して、彼女にいう哲学は現実（に〈行動（動の行動）〉を伴わせ生じる諸能力で「認識論」が成るとみられるがゆえに、いわばこの生きた「認識論」に、同時に「存在論」や「実践論」を含ませ得ると断じたわけであり、彼女にみる哲学を「生きる哲学」と記しおいたのである。

筆者がヴェーユ哲学の核心を「認識論」にみると主張した際、当の「認識論」で語られるべきは何かを今一度明確にさせておかねばなるまい。それはまた、彼女にいう〈思惟と行動との関係〉に結語することになる。これらを以下に述べるにあつて、留意する点がある。それは、彼女が自らを哲学者と名乗りはしないのだから、自らに対し、また〈わたしたち〉に対してさえ、纏まりをみせた哲学すなわち「認識論」として、自身の〈思惟（思想）〉を明示させていたわけではなかったと断りおくことにある。しかるになぜ「認識論」が彼女にみられるといえたのか。「認識論」がいかに組み立てられているかの、その機序（しくみ）を知るは、筆者が彼女の遺した、厩大な書き物より、「知る作用（認識（論））」に関する諸能力の語句（名辞）を抜き出した、筆者なりの読みによった

ことにあり、そこからは彼女にいう「認識論」が見出せるといわねばならなくなる。

しかし筆者が自らの〈思惟（静の行動）〉を用いて、これまでに検証してきた、ヴェーユに語られよう「認識論」に対し、そのすべてに亘ってみたと断じてならないにせよ、それでも何ゆえ「認識論」が彼女に窺えたり、「存在論」や「実践論」より先きに成り、しかも「存在論」や「実践論」さえ兼ねたりすると捉え得たかを繰返してでも明らかにさせておかねばならない。そこで確認できる一は、彼女の遺した膨大な書き物のなかの、「知る作用（認識論）」に関する、諸能力をあらわす語句（名辞）の明記もまた、彼女自らの〈思惟（静の行動）〉の働きによる以外になかったとされることである。さらにその一は、諸語句（名辞）を導き出す、彼女の〈思惟（静の行動）〉の作用は、当然のこと、筆者がこれらの語句（名辞）に従って、彼女にみられよう「認識論」に組み立てんと試みたのとは異なるということにある。しからば相異はどこにあるかであり、〈思惟（静の行動）〉は彼女にあってどのような働きにあるとみえたのかである。筆者の場合は再度いうが、膨大な書き物からの、諸能力の語句（名辞）の抽出をもって、彼女の「認識論」を構築せんとしたにすぎないのであり、加えてこの「認識論」は筆者の〈思惟（静の行動）〉が自らの体験と同時進行的に働くことで、あるいは自らのかつての体験を振返させる働きで組み立てられることではない。

これに反し、ヴェーユの〈思惟（静の行動）〉の作用が可能なのは、彼女が「認識論」の確立を自らに意識させたか否かにかかわらず（どちらかと判じれば、彼女はそれを意識することがない）、すでに為し得た、自らの体験が、すなわち〈身体〉から〈自然的な魂〉へとかわらせずにいない〈行動（動の行動）〉が〈思惟（静の行動）〉に先行するときにかぎられてくるといわねばならなくなる。要は〈思惟（静の行動）〉は、彼女が現実には〈行動（動の行動）〉を起こしたうえで、自ら体感したであろう、〈身体〉や〈自然的な魂〉のそれぞれの、要は一連の、多様な〈運動〉を自らに「問い、構想し、表現する」「手段として」用いられる以外にはなく、かかる〈運動〉の一一をば疾うに一見した、諸能力なる語句（名辞）に当てはめさせ、「書き留め」おくしかなかったということであ

る。だから〈思惟（静の行動）〉に先き立つ、現実の、〈身体〉や〈自然的な魂〉の一連の〈行動（動の行動）〉が彼女に課せられずに、彼女の内部に生じる、〈必然性〉たる〈行動（動の行動）〉を〈思惟（静の行動）〉でいわば写し取り、しかも机上で時系列に従わせ「表現」される「認識論」すらかたちづくられることはないといわねばならぬわけである。

そこからさらに確認できる一は、ヴェーユの「認識論」として記される諸能力こそ彼女の〈身体〉や〈自然的な魂〉に実際に生み出された諸〈運動〉で成っていると、彼女が諸〈運動〉を諸語句（名辞）に充当させたといえることにある。たとえば、彼女や筆者が諸能力の一であった〈sensibilité（感受性）〉をこの各語（原語と邦語）にし得たのは当然、各〈思惟（静の行動）〉を働かせ命名させたにすぎないが、しかし彼女の〈思惟（静の行動）〉の作用だけはこの〈sensibilité〉にかぎらず、現実の〈運動〉すなわち〈行動（動の行動）〉なる、一一の能力に対応させられるべき、各語句（名辞）の選択を可能にすると察知されるし、かの歴大な書き物から、彼女に浮かび上がる哲学を探るには、何よりこの各語句（名辞）に従わざるを得ないとみた、筆者を含む〈わたしたち〉にあって、彼女の「生得的」な〈運動〉なる能力の一一が各訳語に換えられ、〈わたしたち〉の知る、共通な語意に受け取られたにしても、〈感受性〉をはじめとする諸能力の各訳語はその一般的な語意と相違させて捉えおくべきなのである。そのうえ筆者のみるところ、〈思惟（静の行動）〉は彼女の〈行動（動の行動）〉たる「認識論」を形成させる作用にとどまらず、そこに立ちながら、彼女が〈この世界〉のみか「あの世界」を歴大な書き物のなかで「問い、構想し、表現する」はむろんのこと、そこから「あの世界」を〈エロース〉できる人間や人間たち（社会）について「書き留め」させることも可能にさせたのである。以上を答えにするがゆえに、確認できる一は、〈思惟（静の行動）〉が〈運動〉と同時進行的に作用したり、〈行動（動の行動）〉より優先した働きにあったりしてはならないことにある。なぜなら〈身体〉から〈自然的な魂〉への、一連の〈運動〉において、ときにでさえ〈運動〉の〈激しさ〉により、〈自然的な魂〉での〈思惟（する）〉は〈逃亡〉するし、〈空無（真空）〉をかたちづくっていたといい得るからである。〈思惟の逃亡〉や〈思惟の空無（真空）〉の各現象

なくば、「身体の感受性」なる〈行動（動の行動）〉を真に伴わせてはいないことが示唆されるばかりか、この真ではない〈運動〉は不断の〈運動〉でしかなく、そのときはもしかして、彼女すらこの〈行動（動の行動）〉と同時に〈思惟（静の行動）〉を可能にするやも知れない。

とまれ、ヴェーユが実際の〈行動（動の行動）〉を課してもたらされた、〈身体〉や〈自然的な魂〉での、さまざまな〈運動〉を、自らの〈思惟（静の行動）〉の投入にて、書き物のなかに書き込まれる、諸能力なる諸語句（名辞）に表記させていたことにあって、そこから筆者が筆者なりの〈思惟（静の行動）〉で新たに試みる「認識論」は、諸語句（名辞）すなわち諸能力が時系列に配慮されつつ、組み立てられるにせよ、留意すべきはその諸能力が書き物にたんに見出せるだけでよしとできる諸語句（名辞）でなしに、現実を生じさせていた諸〈運動〉であったと繰り返いわねばならぬことにある。だから筆者にとっては、諸〈運動〉を「追体験」することは不可能になる。それがために、彼女を哲学者と捉える筆者は、彼女の書き物に散見される諸能力でもって、「認識論」がかたちづくられることをせめても検証せずにおれなくなったわけである。そのうえこの「認識論」には、彼女に強調されていた、あの〈思惟と行動との関係〉がそれこそ〈関係〉するといわざるを得なくさせる。何より〈生の現実感覚ではなく、活動である〉と語らせた、〈活動〉たる〈思惟（静の行動）〉と〈行動（動の行動）〉は確かに、この一文を読んだ〈一女生徒〉の〈生〉にのみか、〈わたしたち〉の〈生〉に欠いてはならぬ諸能力である。だが筆者が諸能力と指摘し知り得るはここでも、諸能力が〈手紙〉をはじめとした、彼女の書き物の諸語句（名辞）に記されるだけにとどまってならないと再度いわねばならぬことにある。諸語句（名辞）に終始するは諸能力の効力を生じさす、その〈生の現実〉を何ら語りもしないのだ。〈生の現実〉は机上で探し出す諸語句（名辞）にあらずして、〈現実〉に〈活動〉する諸能力という〈運動（行動）〉でなければならない。〈運動（行動）〉しよう諸能力とはいわずと知れたこと、〈思惟〉にあっては何らかの対象に対する、〈自然的な魂〉中の〈精神〉部位での〈思惟（する）〉や〈注意力〉であり、〈行動〉にあっては何らかの対象に対する、〈身体〉や〈自然的な魂〉中の〈魂（une âme）〉部位での各〈感じる（ressentir や sentir）〉

とその各〈感受性〉であり、さらに〈une âme〉の〈(再び)感じる(ressentir)〉とその〈感情〉であった。

だがここに繰返し、〈思惟と行動〉は書き物に書き残された諸語句(名辞)で済ませられるのでないし、両者の〈関係〉が問われるにあっても、書き物に記された〈関係〉としてあるのでもないと断じおくことが必要となる。筆者にすればたとえば、ヴェーユが〈一女生徒〉に宛てた、前段引用の一文通り、彼女たちが各自の〈思惟と行動〉を現実課すと同時に、〈一女生徒〉にも〈行動〉を〈思惟〉より優先させる〈関係〉を伝えんと意図していたようにみえる。ヴェーユがめざしたは、〈身体〉の〈運動〉たる〈行動(動の行動)〉の先行ゆえに、〈思惟(静の行動)〉をして〈行動(動の行動)〉を書き留めさせることのみか、その〈関係〉としての〈関係〉を求めるほかないことにある。そこから〈思惟(静の行動)〉は実際の〈行動(動の行動)〉に従う、この現実を映す〈関係〉を築くしかできない。要は書き物においてですら、〈思惟(静の行動)〉は〈行動(動の行動)〉を記しておく〈手段として〉以外に〈役立〉たぬといえるからして、かかる〈関係〉を改めて聞くまでもなく、現実ではむしろ、書き物に加えられても、〈関係〉は〈行動(動の行動)〉の〈思惟(静の行動)〉への〈関係〉でなければならないということなのだ。そして〈思惟と行動との関係〉が、別言すると〈魂(精神)と身体との関係〉がいかなる〈関係〉を保有するかを筆者に探らせては、筆者は彼女に「認識論」を見出し得るといえたのである。そう指摘したのは筆者であり、彼女でない。そのうえ彼女は自らの書き物に諸能力を書き添えたうえで、その諸能力の一一を自らに試していたのではないだけか、生涯の一時も「認識論」を組み立てんとはしなかったと断りおく。だから現実ならびに書き物での各〈運動〉たる〈思惟と行動との関係〉は、実際に先行した〈行動(動の行動)〉(なる〈感受性〉)がいかに〈思惟〉と現実的に〈関係〉させられたかを当の〈思惟(静の行動)〉を〈手段として〉質し書き残すことに見出されるのでなければならない。筆者が今度は自らの〈思惟(静の行動)〉で、かかる答えを導出すべく、彼女の膨大な作品(書き物)から〈感受性〉を筆頭にする諸能力を拾い集め、筆者にいう「認識論」を組み立ててみたとはいえ、そのなかで彼女を含めた人間たちの〈生の現実〉にとってもっとも優位に

立つとみなされるべき能力は彼女にあって、もはや周知の〈理性（知性）〉もしくは〈思惟（静の行動）〉であり得ずに、身体や〈自然的な魂（une âme）〉での各〈感受性〉や〈une âme〉の〈感受性〉を因にする、諸〈感情〉でなければならなかったのである。

筆者は上記したごとく、ヴェーユの諸作品に多く、また繰返し記される諸能力を取り出せたくらいだから、彼女がその諸能力でもって成り立たせるであろう「知る作用（認識）」を一作品に一括させ述べ語ることはなかったと察知できても、彼女には諸能力の、この〈関係〉を検証する「認識論」が諸作品を通してかたちづくられていたと指摘してかまわなくなる。こうして成ろう「認識論」ゆえに、筆者は彼女に、この「認識論」を基にした哲学が、要は「認識論」より展開されてはそこに与させ捉えざるを得ない哲学が語られくと主張したわけである。だから極論していうに、彼女に窺える哲学は「認識論」だけで適えられるのだ。ただしかかる意味に当てはまる「認識論」すなわち哲学とは、現実での、彼女の〈行動（動の行動）〉にかかわるそれをさすのであって、彼女が〈思惟（静の行動）〉を駆使し打ち立てようところにみられるそれではないし、まして筆者が筆者なりの〈思惟（静の行動）〉によって、彼女の諸作品に書き込まれた諸能力の語を適宜抽出しまとめたそれをさすのではないといわねばならぬことにある。「それ」と指示する「認識論」すなわち哲学は筆者に、彼女がたとえば身体より〈自然的な魂（une âme）〉に伝えられる、一連の〈感受性〉を、もしくは身体や〈une âme〉の各〈感受性〉を何度となく諸作品に表記させていたことを知らしめるにせよ、それでもこうした〈感受性〉たる能力はその表記以前に、実際彼女自らの〈行動（動の行動）〉から生じて成ったのだと再度強調させずにおかなくなる。すると現実の場や時に接して発揮された謂での、この「生きる」能力の諸作品への散見を踏まえて、筆者が「認識論」を疾うに組み立て得ていたのだから、「生きる」能力を中核とした「認識論」が彼女の諸作品に語られていたと断じないわけにゆかないし、筆者はこの「認識論」をして哲学たらしめていると指摘せずにおれないわけである。なぜならすでに一見しておいた通り、現実での、例の〈感受性〉の発揮がそれと同時に、彼女を〈この世界〉に「存在」させるとみたことは、「存在」が〈行動（動の行動）〉を試みた

際の様態をあらわすだけである以上、彼女がその各場や各時の〈行動（動の行動）〉をして、この「存在」を述べ語る「存在論」を言及せしめるはおよそ不可能でしかなくなるが、しかし〈行動（動の行動）〉における、実際の〈感受性〉をはじめとする諸能力の発揮なしに、要はかくいう諸能力の現実の〈運動〉（〈運動〉は身体から〈自然的な魂〉にまで順に「知る作用（認識）」を組み立てるかのように動いている）なしに、その都度「存在」が彼女に実感されないのは確かだとはいえ、こと彼女にかぎらせみれば、彼女がたえず「存在」を実感したことを受けて、今度は〈わたしたち〉に伝えるか、自らに記録させるためか分からねども、〈思惟（静の行動）〉の投入の手助けにより、諸作品をものすることでは、諸作品中に散在し書き留められて成るであろう「存在論」はだから、現実や机上での、かの諸能力で形成される「認識論」にかかわることを明らかにするし、それこそ「彼女に窺える哲学は「認識論」だけで適えられる」と強調しおいた筆者にとって、「存在論」すら哲学すなわち「認識論」に組み入れられることを明示すると捉えられるにあって、筆者は「存在論」すなわち「認識論」をして哲学たらしめている」と断じられたからである。これも彼女の哲学を独自の哲学と、あるいはここにさえ当てはめられよう、筆者にいう「生きる」哲学と語らせるゆえんとなるのである。

「生きる」哲学はしかし、「知る作用（認識）」の一能力によって、つまり現に〈運動〉する〈感受性〉によって、ヴェーユ（人間）が「存在」といえる見方だけから、筆者に命名されるのではない。それでもここで、筆者がまず質しておくべきは、「生きる」哲学に加えられよう他の見方でなしに、彼女（人間）が「存在」とみなされる際は、それをして何を示唆させるのかにある。それは人間が〈運動〉している間、要は〈感じる〉とその〈感受性〉を発揮する間、「存在」ということである。そしてこのことはある意味で、デカルトが〈真理の探求〉において主張したことに、つまり彼（わたし）が〈思惟する（cogito）〉間、〈わたしは存在する（sum）〉としたことに似るごとくみえるだけか、ヴェーユとデカルトの哲学はいずれも「認識（論）」の能力に基づいて「存在（論）」が語られる順に展開されるかのようである。だが両者の哲学は果たして「ある意味で似る」といって済ませられるのか。否である。「存在」をば、身体（corps）

での〈感じる (ressentir)〉とその〈感受性 (sensibilité)〉による「知る作用 (認識)」と同時的に実感させられていた (だから身体で「存在」を「認識」できるといえる)、彼女の場合と比べ、彼の場合、「存在」し得るは〈真理の探求〉にいう〈精神 (esprit)〉での〈能動〉能力〈思惟する (penser)〉とその〈受動〉能力〈思惟 (pensée)〉によると認められども、こうした能力は彼が〈真理の探求〉の〈精神〉を〈脳 (身体)〉から〈独立〉させてみるかぎり⁽¹⁾、一体どこで発揮されるのか、その際彼 (人間) の「存在」は身体や〈精神〉にも〈関係なく〉なるのだから、奈辺に〈存在する〉とされるか、しかも「存在」は彼にいう、〈能動〉〈受動〉からする「認識」と同時に成るか (〈ergo (それゆえ)〉は〈cogito (認識)〉をして〈sum (存在)〉を引き出させる役目であるために、「存在 (論)」が「認識 (論)」に含まれるとした、彼女の示唆にはとどかない)、そうすると人間は彼にいわせる〈能動〉〈受動〉の〈運動〉でもって、真に「生きる」ことができるか、多々疑問が残るのである。さすればこれらに答える必要があるのだが、今は彼がこの〈Je pense (cogito), donc (ergo) je suis (sum)〉に続いて、〈わたしは存在する、それゆえ神は存在する (Sum, ergo Deus est)〉⁽²⁾とまで主張せずにおれなかったことはなぜかを、なかでも〈神は存在する〉と記されたにあって、彼のこの思想 (哲学) と筆者にいう、彼女の「生きる」哲学はどこが異なるかを確かめるべきである。されどここは彼の主張を一から論じる場ではないとみえるだけに、一言にしてまとめおくほかなくなる。すなわち不完全者なる彼 (人間) は完全者なる〈神〉の観念を生得的に持ち合わせるとしたゆえに、〈神〉は彼 (人間) の〈理性 (知性)〉の〈思惟 (する)〉〈神〉に支えられて〈存在する〉ことが、この観念 (思惟) をして彼 (人間) たる〈わたしは存在する〉を確実に保証させられることが明らかにできたのだと。換言すると彼 (人間) は〈思惟する〉が〈わたしは存在する〉を、そのうえで〈生得観念〉⁽³⁾としてであれ、〈神は存在する〉を導き出したところで、後者それぞれの〈存在する〉は〈わたしは思惟する〉を原因とした、その結果での〈関係〉に依拠されるほかなく、〈思惟する〉能力から後者の各「存在」との〈関係〉を、たとえば彼女の場合にすでに記し、後述もする能力で同時的に成り立たせるとはいえなかったと。つまり〈思惟する〉にあって、その〈思惟〉な

くば、それこそ各「存在」を〈思惟する〉〈関係〉は生じてこないし、〈思惟する〉にせよ、彼（人間）の「存在」は〈思惟（観念）〉に、〈神〉の「存在」は〈思惟〉中の〈生得観念〉にとどまって、彼女のように、彼（人間）の「存在」をして「生きる」を体験（身体での体感や〈自然的な魂（une âme）〉での実感）せしめる〈関係〉には、さらに〈超自然的な魂（l'âme）〉に〈神〉（の「存在」）を〈受け取〉らせる〈関係〉にはならなかった。それでも彼にいう〈神〉がキリスト教における〈神〉をさしたか否かは別にして、人間（の〈思惟する〉〈理性（知性）〉）を〈神〉より優位に位置づけた〈関係〉がキリスト教で明示される、〈神〉のもとに人間や自然を配する序列的〈関係〉を逆転させたことを示すは確かであるが。

一方ヴェューユはデカルトに問われた〈わたしは存在する〉や〈神は存在する〉を、彼の主張する〈思惟（観念）〉要は人間〈理性（知性）〉による〈思惟する〉に依存して確証するのではなかった。彼女の場合は以下にも記す通りであった。まず、彼女に窺える哲学が哲学全体を根と幹や枝に支えられる木にたとえたデカルトに従い語られるかどうかはともかくも⁽⁴⁾、彼女の哲学なる〈木〉には、疾うに触れおいた「認識論」「存在論」や後述しよう「実践（価値）論」がおおよそ〈根〉〈幹〉〈枝〉のいずれかとして含まれると、また彼女の哲学も彼にいう〈真理の探求〉での哲学をして〈思惟する（penser）〉に活路を求めさせるところに展開する「認識論」にあらずとも、彼女の哲学を例の能力で組み立てる「認識論」ではじめることでは彼の哲学の出発と同様であると察知しては、筆者は彼との比較のためでなくとも、彼女自らの〈思惟（静の行動）〉でものした諸作品から抽出できよう、「例の能力」と記した、身体や〈自然的な魂（une âme）〉の各〈運動〉たる、要は身体より〈une âme〉に伝えられる一連の〈運動〉たる〈感じる（ressentir や sentir）〉とその〈感受性（sensibilité）〉を基軸に述べ語り構成される「認識論」を、さらにこの〈運動（感受性）〉をもって彼女の「存在」の様態を述べ語らせる「存在論」を打ち立ててみるべく、筆者なりの〈思惟（静の行動）〉を課さねばならなかったにすぎないが、しかし当の彼女にあっては、自らの〈思惟（静の行動）〉で「認識論」や「存在論」を諸作品に書き残すだけで「生（きる）」を望んでいたのではなく、自らの現実にあの〈感

じる」とその〈感受性〉を発揮させる〈運動〉要は〈行動（動の行動）〉が彼女をして「生きる」「認識（論）」すなわち「存在（論）」を現出させずにいなかったのだと再度いっておかねばなくなる。これこそ筆者が「認識論」や「存在論」でもって、彼女の哲学を「生きる」哲学と名付け得るゆえんになろう。

そして、ヴェーユにみる「生きる」哲学には、デカルトに〈神は存在する〉といわせた、〈神〉の「存在」のことが粉う方も無く、彼女（人間）の「実践（価値）論」となって組み込まれると読み得ることに留意すべきである。だが彼女にいう、いわば〈神〉の「存在論」はアリストテレス以来語られ続ける、学問（思惟（静の行動））たる「形而上学」に匹敵しようとも、そののみか、つまり彼女（人間）の〈行動（動の行動）〉での「認識（論）」すなわち「存在（論）」に、またむろん彼女自らの〈思惟（静の行動）〉による「認識論」すなわち「存在論」に関係するだけでなく、独特（独自）な〈神〉の「存在論」になると捉えおく必要がある。すでに一見した通り、〈神〉は〈わたしたちが神を愛（エロス）することができるようにと、愛（アガペー）によって、わたしたちから撤退するのは神なのである〉ごとく〈この世界〉を〈創造〉したがゆえに、換言すると「あの世界」に住まう〈神〉は〈この世界〉と〈痛ましく愛（アガペー）されている〉〈必然性〉としてかかわるがために、彼女（人間）が〈運動（動の行動）〉を試みるか否かにかかわらず、〈神〉の〈撤退の業〉要は〈愛（アガペー）〉の〈業〉で成る、〈この世界〉の〈創造〉は〈神〉をそこに不在にさせる。〈神〉が〈この世界〉に「不在」するは、〈わたしたち〉がその〈必然性〉たる〈世界の美〉に出くわしたり、〈不幸〉に遭遇したりすることで証明されるといえるからである。〈わたしたち〉人間が〈世界（自然）の美〉であり、〈不幸〉である、〈この世界〉の〈必然性〉に〈服従〉させられることは、彼女が〈人間の本質というものは、魂の願望が生得的に魂にかかわる行動、運動、挙動（の仲立ち）によって身体を経由させられないかぎり、魂に願望を取り込めないように組み立てられている〉や〈それ（世界の美）は世界とわたしたちの感受性との関係であり、この感受性はわたしたちの身体と魂の構造に属しているのだ〉と述べては、そこに〈人間の本質〉をしてかかるごとくに〈組み立て〉〈属〉させる、〈わたしたち〉人間の〈必然性〉をみると察知され得るからして、人間

の「生きる」場である〈この世界〉さえ〈必然性〉でなければならないことによるわけである。

〈わたしたち〉人間が「生きる」かぎり逃れ得ぬ、人間自身の〈必然性〉や〈この世界〉の〈必然性〉に、ヴェーユ（人間）はどう立ち向かったのか。彼女はたとえば、人間や〈この世界〉の〈必然性〉から目を背ける機能も持とう〈思惟（静の行動）〉をはじめに、直接に行使したり、これに〈意志〉を動員させたりするのでなしに、人間の〈必然性〉に従わせることでは、かの〈世界の美〉と〈不幸〉のおのおのに対し、前段の二引用文に記された、〈行動（動の行動）〉なる〈感受性〉と〈願望〉を発揮せんとし、さらには〈この世界〉での未見がゆえの〈存在しないものに現実注意する〉〈（知的）注意力〉を傾けんとして、これらでもって〈この世界〉の諸現実を引き受けるほかなかった。しかしそれはいかなるためにか。人間自らの〈自然的な魂（l'âme）〉の、こうした能力によって、〈l'âme〉を〈空無（真空）〉に、筆者にすれば非存在にしながら、〈存在しないもの〉すなわち〈神〉に出会うためであった。彼女にとっては、そこに「生きる」があった。「生きる」ことは上記した〈感受性〉に例を取っていえば、彼女（人間）が身体を動かす〈運動（労働）〉要は〈行動（動の行動）〉を自らに課するかして、〈必然性〉の一たる〈世界（自然）の美〉を〈感じる（ressentir）〉際、〈身体と魂の構造に属している〉、その〈感受性〉の、〈身体と魂〉のそれぞれにとどまるだけでなく、〈身体（神経や血管）〉から、この〈激し〉い〈運動〉となって伝えられる、〈魂（notre âme）〉（所有形容詞で記されるために定冠詞付きと同じに扱い得る魂）中の〈une âme〉への〈受容〉が実現されるところでの「生き」方をさすにちがいない。なぜなら〈感受性〉を生じさせよう〈行動（動の行動）〉が不断みられない〈激し〉い〈運動〉を伴わせるだけに、〈自然的な魂（l'âme）〉全体を〈空無（真空）〉にし、同時に〈超自然的な魂（l'âme）〉なる、「非空間、非時間、非物質（非質料）」の〈超自然的な領域〉に〈移行〉せしめては、もはや〈超自然的な魂〉には、かかる〈領域〉に住まうとされる〈存在しないもの（神）〉に〈方向づけ〉られる、上記例からの、〈感受性以上〉という〈超自然的な能力〉〈愛（エロース）〉しかなくなり、〈空無（真空）〉が〈愛（エロース）〉を導き出すからであった。

だがヴェーユはなぜ〈存在しないもの（神）〉と書くことができたのか。〈存在しない神〉と記したことは〈この世界〉と「あの世界」がかかわる（繋がる）とされるにあって、かの〈自然的な魂（l'âme）〉が彼女にいう〈空無（真空）〉に、筆者にいう「非存在」になり得れば、デカルトが〈理性（知性）〉で理解し語る〈神は存在する〉のではなくなる、「存在する神」を現実にはさせることを、したがって彼女（人間）の〈l'âme〉が「非存在」になっていなければ、〈存在しない神〉のままであり続けようことを含意させ得る表現なのである。同様に、〈この世界〉が〈世界（自然）の美〉だけでなければ、かかる〈美〉以外の〈必然性〉を〈神〉により創られたとしかいいようがなくなるはこれを「未見がゆえの〈存在しないもの〉」にするであろうし、その〈世界（自然）の美〉以外の〈必然性〉に対し、要は例の〈極度の不幸〉に対し、彼女がこの〈不幸〉をば〈神〉との関係（繋がり）なしに解決できぬといえたほどの〈不幸〉と受け取るならば、こうした〈不幸〉にさせる一因を〈感じる（sentir）〉当のそれはいまだ〈存在しないもの〉に当てはまるであろうし、彼女が一因を〈感じ〉見抜いたからこそ、〈不幸〉を〈極度の不幸〉と表記し得たにちがひなからう。

すると〈この世界〉の〈必然性〉である、〈世界（自然）の美〉や〈不幸〉がおのおの、〈感受性〉ならびに〈歓喜〉や〈願望〉などの諸〈感情〉と〈（知的）注意力〉のいずれかの〈自然的能力〉の仲立ちで〈超自然的な領域〉に「存在する神」との出会いに関係させられるとみることは、ヴェーユの現実での、かかる「認識（論）」から出発し、「認識（論）」が「存在（論）」を含意させたと同時に、ここで強調しておく「実践（価値）（論）」の謂にさえふさわしくあると、さらに彼女の「生き」方であった、この「認識」「存在」と「実践（価値）」（の中身）を諸作品に散見させていたと確かめられる以上、これらだけの思想でもってしても、彼女に哲学が成るといわせ得るのではなからうか。その通りなのだ。実際に〈行動〉する「実践」という意も含める〈運動〉が彼女にとって、〈神〉に到達させる、最大の〈価値〉をもたらさずにはいなかったし、〈運動〉の只中では〈思惟（静の行動）〉を働かせ得なかったのだから、彼女が自らのためか、〈わたしたち〉に伝えるためかのいずれでも、書き物（諸作品）にして残そうとすれば、この〈運動〉での体験（実感）をそのまま諸作品に述べ語る

「実践（価値）論」としてまとめ得るとみるは、「実践（価値）論」が諸作品に散見していた証左になるわけである。要は彼女が「実践（価値）論」を記さずして、筆者はこれを打ち出せなかったということであり、「認識」も「存在」も各「論」になったはこの「実践（価値）論」と同様である。

以上から、ヴェーユに窺える哲学は哲学として一般に語られる部門を兼ね備えているといい得るが、それでもあのデカルトにいう〈真理の探求〉のように、「認識論」に立ったうえで、「存在論」そして『情念論』（これは筆者にいう「日常的用法」でもっぱら通用すると思われるが）でも知るとき「実践（価値）論」が順次に、しかも単独（個別）に成るのではなく、身体能力〈感受性〉なる〈運動〉に基づいた「認識」が同時に「存在」と「実践（価値）」を可能にすると読むことができる。そのうえここでも筆者が筆者なりの〈思惟（静の行動）〉で「認識論」を土台にしたと捉えられる、彼女の哲学は彼女自らの体験（実感）なしに、自らの〈思惟（静の行動）〉だけで組み立てられるのではなかったといわざるを得なくさせる。換言すると彼女にあって哲学であるは机上で構想されよう哲学であり得ず、〈生の現実〉を体現させる、〈行動（動の行動）〉要は〈運動〉によっていたと、つまり彼女の哲学は「生きる」哲学ともみなし得た通り、身体能力〈感受性〉なる〈運動〉がまさに〈生の現実〉をさす「生きる」ことを、かつ「生きる」「認識」が「存在」と「実践（価値）」を証しするがゆえに、「生きる」そのものでなければならなかったということである。この「存在論」と「実践（価値）論」を同時に含む「認識論」でもって哲学であると筆者にいわせたはむろん彼女の哲学が諸作品に語られているとみたからだ、しかし諸作品にかく書かれたところで、彼女はその哲学を構築するために、〈行動（動の行動）〉し、この体験（実感）をば自らの〈思惟（静の行動）〉を駆使してまとめさせたのだと捉えてはならない。彼女が哲学構築を意図しめざしていたのではなく、自らは〈この世界（必然性）〉とともにあるための、身体能力の〈行動（動の行動）〉にはじまる「生きる」「生き」方を求めていただけであると察知される。かかる「生き」方はそれ自身、「認識（論）」すなわち「存在（論）」すなわち「実践（価値）（論）」に適う〈運動〉をあらわし得たからして、これをして「生きる」哲学と表記するほかなかったと、あわせて筆者の〈思惟（静

の行動))においてさえ、彼女にいう身体の〈感受性〉が「認識論」をかたちづくる、基本たる能力とみえるからして、この「認識論」をして現実での〈行動(動の行動)〉を論理的に体系的に終始一貫させ整合たらしめると指摘し得ては、彼女の哲学はその「認識論」があればこそ成ると繰返しおく。

さらに確認しておくべきは、ヴェーユが筆者にいう「生きる」哲学を提唱した哲学者であることに頓着しないだけか、この「生きる」哲学を〈わたしたち〉に伝えてくれたはなるほど、膨大な諸作品をものした、自らの〈思惟(静の行動)〉をふんだんに、また並外れて働かせたところによると見えようが、しかしその〈思惟(静の行動)〉は彼女にいう〈自然的な魂(l'âme)〉内の、筆者にすれば〈脳〉内の〈精神(esprit)〉なる部位で動くにすぎず、その作用のみをもって、筆者は「生きる」と、まして筆者のいう「生きる」をさす哲学と形容させるのではないということにあった。彼女の哲学はもっぱら身体の動きである〈行動(動の行動)〉すなわち身体有能力〈感受性〉を出発点に、これが〈l'âme(脳)〉にも影響を及ぼさずにいない点で、現実の〈運動〉を証ししている「生きる」哲学でなければならなかったのである。

ところで、筆者がヴェーユに窺える哲学を「生きる」哲学と名付けて長々と説明したは、哲学が彼女でみたように、自らの体験にかかわらせることであるべきで、学問(科学)(science)にとどまるだけであってはならないことを主張するにある。つまり筆者は哲学を机上にあって、現実を直接写し取る〈理性(知性)〉で構築させるのではなく、写し取りをするにせよ、それ以前に、実際に身体の〈運動(行動)〉をしていたことに等しく捉えねばならぬといたいのである。〈理性(知性)〉では身体を動かして実感する〈生きる〉を現実にはできない。それでいて〈運動(行動)〉が学問(科学)としていう哲学にみられるも、〈感じる(ressentir)〉とその〈感受性〉なる〈運動(行動)〉が身体に起こり、〈自然的な魂(l'âme)〉に伝わることでその「認識」の一能力となり、同時に「認識」の場で〈l'âme〉を「認識」させたように「存在」させ、ときには〈l'âme〉の「認識」と「存在」を〈空無(真空)〉にして、〈超自然的な魂(l'âme)〉を現出せしめ、そこに生じよう〈超自然的(諸)能力〉のいずれもがいつしか〈神〉との出会いを可能にするからして、「(自然的)認識」をして「不在」にさ

せるごと「(自然的) 存在」たらしめると同時に、「(超自然的) 実践(価値)」をさえ兼ねさせるといえるわけである(この「(超自然的) 実践(価値)」の「(自然的) 実践(価値)」への根づきが筆者にすれば、「生きる」ことに課せられるし、彼女の構想による、戦後の理想社会建設に向けてなくてはならなくなろうと読み得る)。したがって〈超自然的(諸)能力〉すなわち各〈愛(エロース)〉ゆえに、〈愛(エロース)〉が「(自然的) 認識」に与するとは捉えられずとも、この宗教的語句を彼女の哲学に無関係だとして排除すべきでないことが肝要である。これを彼女の哲学に取り入れないでは、その全体がみえてこない、要は彼女(の諸思想)に哲学が見当たらないといわざるを得なくなるだけか、その結果彼女は相も変わらぬ、宗教思想家の相貌で、あるいは「(自然的) 実践(価値)」を実現させるねらいと切り離れた社会思想家の相貌で呼ばれ語られ続けるにちがいないのだ。だが彼女自らが「生きる」を証した哲学はそれだけで、彼女をして、すでに触れおいたような「独自の」哲学を、こうした一を浮かび上がらせる哲学者ならしめたといえるのだから、これも疾うに指摘した通り、彼女に各相貌を宛がい、そのいずれかが、また両方の肩書きが彼女とするに固執するはもはや適当ではないのである。

さて筆者はこれまでのことで、ヴェーユが実際に身体の〈運動(行動)〉を課す、まさにその「生き」方を哲学と、つまり「生きる」哲学と呼び、かつ「生きる」にあっては〈理性(知性)〉で組み立てたのではないところから、彼女の哲学の「独自」さを見出し得るといえるとともに、さらにこの「生きる」「独自の」哲学をして、拙論の題名に記したごとく、「身体論」哲学とも命名させ得るのである。なぜならこうした名称を付したは、筆者が彼女にいう〈思惟と行動との関係〉なる語句でもって、彼女の哲学を問いはじめたことが契機であったと振り返り得るからである。かかる〈関係〉は筆者にすれば、疾うに一見した、〈思惟(静の行動)と行動(動の行動)との関係〉を、また究極には〈魂(精神)と身体との関係〉をさすにほかならなかった。しかもかかる〈関係〉が何ゆえに哲学を語ることになるかというに、それは筆者に、〈思惟する〉〈思惟(魂中の精神)〉がいかに〈行動(身体)〉に〈関係〉するか「遠心的」〈関係〉を問わせるよりか、身体たる〈行動(運動)〉すなわち身体の〈感じる〉とその

〈感受性〉の方がいかに〈脳（身体）〉とみてよい〈魂（精神）〉に〈関係〉するかの「求心的」〈関係〉を質さねばならぬ能力としてあったのであり、さすれば身体の〈感覚〉にも当てはまろう、この〈関係〉を見定める「認識論」を成り立たせることが哲学を語るにとって優先される必要があったからである。それにここで繰返してでもいわねばならぬは、かかる〈関係〉こそ現に「生きる」証しである、身体の〈運動〉たる〈感受性〉を発揮せしめよう「認識」下の彼女（人間）をばしかるべき状態で「存在」させ、「実践（価値）」に駆り立たせるのだから、この身体の〈運動（動の行動）〉を「生きる」中核に見据えての、彼女の〈思惟（静の行動）〉でも成るであろう「認識論」が同時に「存在論」と、形而上学にかかわらせる「実践（価値）論」を織り込み、これらにまで展開されたことを示すほかに、筆者はそれで彼女に窺える哲学を、筆者の〈思惟（静の行動）〉においてさえ、「生きる」「独自の」哲学と、なおまた「身体論」哲学と銘打つ以外に表現できないことにあったのだと。

なかでも、ヴェーユの哲学を「生きる」や「独自の」と各形容されるそれと同意に捉えるが、これらのように抽象的でないとする名辞で「身体論」哲学と筆者に名付けみることが許されるはまず一として、「身体論」哲学が〈脳（魂）〉を含めた身体を述べ語る論であり、その哲学をさすならば、哲学を形成させるとした三部門のうち、前段に記す〈思惟（魂）と行動（身体）との関係〉での身体から〈魂〉に伝えられる、「求心的」〈関係〉によって成るのが「認識論」であり、こうした「認識論」が彼女にとって「生きる」を、要は哲学を現実にはさせる原動力となって、「存在論」と「実践（価値）論」を問う順次より先きに質されることでもって、いや正確にいえば「認識論」それ自身、この二部門の実現も兼ね、おのおのを打ち立てるにかかわると指摘できたことでもって、その「身体論」哲学がすでに論じてきたとき、身体有能力〈感受性〉に基づいて展開する「認識論」に代表され語られてかまわぬといい得るからである。したがって「身体論」哲学は「生きる」「認識論」すなわち哲学に等しくなるし、身体を中心に成立せしめる「身体論」哲学が〈思惟（静の行動）〉だけを試みて「生きる」のではない「生きる（動の行動）」を実現させるのである。その実現をみるは再度いうが、〈この世界〉の〈必然性〉たる、例の〈世界の美〉や〈不

幸)を身体で〈感じる〉その〈感受性〉から〈魂(脳)〉に伝えられる、要は身体の〈感じる〉とその〈感受性〉ではじまりかたちづくられる「認識論」なくば可能にならないと、別言すると「生きる」哲学はこの「身体論」哲学すなわち「認識論」をしてはじめて「存在論」と「実践(価値)論」を問題にさせ得ると、換言するとこの「認識論」なしに「存在論」と「実践(価値)論」を生じさせないのが「身体論」哲学といわせるゆえんであるということにあった。

そのうえ筆者が「身体論」哲学というのは、このさらなる理由の一として取り上げられよう、「認識論」に対する観点が問われていなければならないからである。「認識論」は一般に理性論、合理論、理想論、観念論や感覚論、経験論、実在論、唯物論と各呼ばれたりするとされるが、ヴェーユにみられる「認識論」は以下では上記中の観念論と唯物論に代用させて述べられるにしろ、筆者が「身体論」哲学と唱えては、このいずれにも与しないと、それこそこれも「独自の」とみることができるのだ。したがって彼女は、筆者がここ数年で論じてきた、哲学者デカルト、実存主義者ボーヴォワール(サルトルについては次号以降)のごとき観念論者でも、マルクス(またラ・メトリ⁽⁵⁾やデイドロ⁽⁶⁾)のごとき唯物論者でもない指摘せずにおれなくなる。なぜなら前記したなかで、デイドロを除く哲学者たちや知覚の「我れ(moi)」を主張したことで周知のメルロー＝ポンティをはじめとする、他のいかなる哲学者(観念論者や唯物論者)たちも、理性や感覚の各能力とみられることのない、身体と〈魂〉の各〈感受性〉要するに不断には、身体から〈魂〉に伝わると捉えられる、一連の〈感受性〉を問題にし語ることがおよそなかったといえるからである。換言すると筆者の知るかぎり、フランス哲学(思想)界で〈感受性(sensibilité)〉について質したのはヴェーユのほかには、デイドロであったということである。

そこで筆者はデイドロが語る〈感受性〉の文章を、筆者なりに組み立てみる各引用文にして、ヴェーユにいう〈感受性〉と多少なりとも比較しておく必要がある。

La sensibilité est une qualité propre à l'animal, ... Toutes les parties de l'animal ne paraissent pas avoir cette qualité: il n'y a que les nerfs qui paraissent l'avoir par

eux-mêmes.⁽⁷⁾

感受性は動物に固有の性質である、... 動物のあらゆる部分がこの性質を有しているようにみえない。神経だけがそれ自身で感受性を有しているのだ。

ses parties organiques obéissent donc à la sensibilité.⁽⁸⁾

この諸器官部分はそれゆえ感受性に正確に反応する。

Je serais tenté de croire que la sensibilité n'est autre chose que le mouvement de la substance animale, son corollaire, ...⁽⁹⁾

わたしは感受性が動物的物質の運動以外の、その必然的帰結以外の何ものでもないということを信じたくなろう。

La sensibilité de la matière est la vie propre aux organes. ... la sensibilité appartient à la matière animale.⁽¹⁰⁾

物質たる感受性は、その諸器官に固有の生命になる。... 感受性は動物的物質に属している。

Sans la sensibilité et la loi de continuité dans la texture animal, sans ces deux qualités l'animal ne peut être un.⁽¹¹⁾

動物的構造にあって感受性やその持続的法則がないのでは、(要は)この二つの性質なしには、動物は一であることができない。(括弧内は筆者)

On en viendra quelque jour à démontrer que la sensibilité ou le toucher est un

sens commun à tous les êtres. ⁽¹²⁾

感受性あるいは触覚はあらゆる生物に共通な感覚になることがいつか証明されるであろう。

Cette force d'irritabilité est différente de toute autre force connue; c'est la vie, la sensibilité; ... ⁽¹³⁾

この被刺激性（受容性）の力は周知の、ほかのいかなる力とも異なっている。それは生命であり、感受性である。

Pourquoi ne pas regarder la sensibilité, la vie, le mouvement comme autant de propriétés de la matière: ... ⁽¹⁴⁾

なぜ感受性、生命、運動を物質の特性としてみないのか。

Toute manière d'être de l'âme qui en a la conscience, produite en elle-même par ses propres opérations, ou par un changement dans le système nerveux, s'appelle sensation. Sentir c'est vivre. ⁽¹⁵⁾

魂が意識する、その様相はすべて、この意識をして魂自身の働きにより、あるいは神経組織内に生じる変化により、魂自身に産出させるのだから、感覚と呼ばれる。感じること（感受性すなわち感覚）は生き（てい）ること（生命）である。（括弧内は筆者）

les lois du mouvement des corps sensibles, animés, organisés, vivants, ne sont pas même ébauchées. ⁽¹⁶⁾

敏感な、活発な、組織された、生き（てい）る物質の運動法則はいまだ粗

描すらされていない。(括弧内は筆者)

〔続〕

註

- (1) René DESCARTES 《ŒUVRES LETTRES》(Gallimard) 中の《OBJECTIONS ET RÉPONSES》P.484 〈l'esprit peut agir indépendamment du cerveau (精神が脳と関係なく(独立して)働きかけ得る)〉
- (2) Ibid., 《RÈGLES POUR LA DIRECTION DE L'ESPRIT》P.83 (そこには〈Je suis, donc Dieu existe〉と記される)
- (3) Ibid., 《MÉDITATIONS》P.287 〈Or de ces idées ... me semblent être nées avec moi, ...〉(この引用文はすでに拙論「デカルトにおける理性と感覚(4)」(新潟大学人文学部人文科学研究, 第101輯, 1999年)P.65に以下も含まれ用いられる)
- (4) Ibid., 《LES PRINCIPES DE LA PHILOSOPHIE》P.566 〈Ainsi toute la philosophie est comme un arbre, dont les racines sont la métaphysique, le tronc est la physique, et les branches qui ...〉
- (5) Julien Offray de La METTRIE (1709年-1751年)(主著に《L'homme-machine (人間機械論)》1747年などがある)
- (6) Denis DIDEROT (1713年-1784年)(主著に, 以下の註に用いる《ÉLÉMENTS DE PHYSIOLOGIE (生理学要綱)》1778年などがある)
- (7) Denis DIDEROT《ÉLÉMENTS DE PHYSIOLOGIE avec les《Notes autographes》》(DIDEROT ŒUVRES COMPLÈTES, TOME XVII, HERMANN ÉDITEURS DES SCIENCES ET DES ARTS)P.305
- (8) Ibid., P.304(所有形容詞 ses は直前原文中の des animaux sensibles et vivants にして, あるいは註(7)引用文中の les nerfs を冠詞縮約の des nerfs にして対応するに等しい)
- (9) Ibid., P.306
- (10) Ibid., P.306
- (11) Ibid., P.307
- (12) Ibid., P.308
- (13) Ibid., P.308

(14) Ibid., P.333

(15) Ibid., P.447

(16) Ibid., P.305